

# 豆 狸 の 寝 言

副会長 三原幸二

毎年、暑い夏がやってくると、なつかしく思い出す顔がある。

私とほぼ同時に入社したK君である。もうずっと以前に退社して、今はいない。二、三年のつきあいだったように思う。

K君はたしか兵庫の出身で、入社して3ヶ月ほどたつと、ようやく大阪の地理がわかりかけてきた。そこで先輩に地図を書いてもらって、自転車に乗って一人で配達に出かけた。

自転車なら二〇分もあれば行って帰ってこられる距離であった。が、昼前に出かけたのに、一時になっても二時になっても帰ってこない。そのうち、お客様から督促の電話がかかってきた。

これはおかしい、ということになって、二、三人がスクーターや自転車でさがしに回った。

五時になったが、何の連絡もない。

七時になっても帰ってこない。

いよいよ警察へ捜査願いを出そうかとみんなで話し合っている時、K君から電話がかかってきた。

「腹がへって動けまへん」

先輩が今いる場所を聞き出すと、「絶対にそのまま動くな」といって、当時一台しかなかった車で迎えに行った。弁天町の停留所にへたりこんでいるK君を見つけたのは、夜の九時頃であった。



「品物を届けなければ」というK君から、先輩がそれまでのいきさつを聞き出すと、北は梅田、東は石切、南は堺、西は弁天埠頭まで行き、九時間ものあいだ、大阪中を自転車で走りまわっていたのである。

なんともあいた口がふさがらない話である。小銭くらいは持っていたはずである。パンを買うことも、電話をかけることもできたはずである。が、K君は早く品物を届けなければ、という気持ちが先に立って時間も何もかも空白になり、必死で走っていたのである。それを思うと笑う気になれなかった。三〇数年前の、なつかしいなつかしい思い出である。

(昔の同僚K君)